

タッシリオン

——墮ちたる帝国の記録

タッシリオンのウィザードといえばまさに伝説の魔導師そのものである。ルーンをその身に刻み、全てをあざ笑い、一声で軍勢を壊滅させ、今や神話の中にしか存在しないウリーチャーを召喚する。彼らの帝国は賢明なる王とその配下の7人の偉大なるウィザードたちによって建国されたが、最終的には権力の腐敗と魔術そのものために崩壊した。その頃、ウィザードたちは彼らの所有するものにルーンでしるしをつけていた。この行為こそが、強力な魔術師たちの財産にはすべてルーンが描かれ、巨人や竜たちが人間の意志の前に膝を屈するか帝国の伝統となったのである。

■■タッシリオンへの招待

タッシリオン帝国の拡大は、征服行為と、そして高度に洗練されたその魔法によって支えられていた。魔法こそが帝国の支配者を定義するものであった。この魔法はさまざまなかたちで血の犠牲を捧げ、秘文を描き、次元を超えるものであった。ルーンの魔法と、ルーンに縛られた巨人達なくしては、タッシリオン帝国がかくも広大な世界を征服しつくすなどありえなかったろう。が、そのふたつを手にしたとあっては、帝国を止めうるものはなかった。

■ルーンを記す

後に帝国を支配するようになったルーンロードたちだが、帝国を最初に打ち立てたのは彼らではない。建国の主は、帝国の七つの主要都市にその名を冠して讃えられた始祖王シンである。1万と1千年以上もの昔、シンは修道士のそれに範を取り、騎士と魔術師の踏むべき法の道を定めた。また王国の富をなげうって貧しきものを救い、飢えを一掃した。善き君主であったのみならず、シンは預言者でもあった。生きているうちに人々のための楽園を打ち立てたいと望んだシンは、現実とされるものの域を超えて力あるものと呼び集め、古代の竜たちとも約定を結んだ。この謎めかしい約定を結ぶことで、シンはルーン魔法を理解するようになった——ルーンとはすなわち造化の技を書き記す言葉であるともいう——そして、タッシリオンに神秘的な女神リサーラの信仰をもたらしたのである。定めた道を、締結した約定を、公布した法令をこれらの力あるシンボルで書き記すことにより、彼は交易を統制し、正義を確立し、拡大し続ける巨大国家を七つの大領土に分割した。魔法は王の行いを助けて力を与え、王の統治は行き届いた。シンの、魔法に満ち満ちた統治はルーン法として知られるようになり、目覚ましい効果を発揮した。ルーン法は各領土を治める王の領臣に力を与え、造化の驚異を起こし、タッシリオンが驚くべき速さで力と影響力を増していく根源となった。後に

帝国の神聖期と呼ばれる時代である。

■ルーンロードとルーン・ジャイアント

シンは自ら作り出したものを、何らかの手段で永らえさせた。凄まじい速さで拡大し完成された彼の帝国の領土や税制、軍、その他もろもろの全てを管理することは不可能であったため、彼は統治者を指名した。いずれもが有望な秘術の研究者であり、その知識を見込まれ、また統治者となればルーンの魔法に関して知見を得ることができるとあって、彼らはそれに応じた。これらの魔導師たちのうち最大の力を持ったのが、7名のルーンロードである。いずれもが強力なウィザードで、ルーンや、後に“罪の魔法”(コラム参照)として知られるようになった王室の秘術の使用に、目覚ましい技能と情熱を示した。ウィザードたちの力は次第に強大なものとなっていき、それにつれて彼らは始祖王の気まぐれのもとに縛られて暮らすことに不満を募らせるようになった。彼らは秘密裏に神秘的な外方次元界の力や強欲なドラゴンたち、そして道を踏み外したアボレスたちと契約を結んでいた。この約定によって、最初のルーン・ジャイアントが生まれた。これは身長40フィートにも及ぶ力の権化であり、彼への服従の見返りとして他のジャイアントに対する支配力が得られた。巨人奴隷の軍勢の力でルーンロードたちが作ったのは道や壁だけではない。帝国の栄誉を讃える——当初の目的はそうだったのだ——巨大なモノリスや石像も建てられた。が、やがて石像は彼ら自身の姿に似せたものとなった。

時が流れ、帝国の将軍や相談役、そしてルーンロードたちは、老帝シン(毫碌した彼はそのように称されていた)の魔力では既に国家が維持できなくなっていることを見て取った。110年の治世の後、シンの魔法は深紅の炎を上げ、宮殿の大半を焼き尽くしながらシン自身を滅ぼした。始祖王の遺骸は見つからなかった。皇帝の謎めいた死など気にも留めず、ルーンロードたちは自分たちの領土を確保し、シンの最も有力な将軍や大臣たちを従え、シンの長男を傀儡皇帝としてシンの都に残した——そこは都とは名ばかりの、小さな山中の牢獄であった。そうしておいてルーンロードたちは、より遠大な計画に手を着けた。つまり自分こそが他のルーンロードを服従させるのだとばかりに、さまざまなルーンを己の手でさらに支配しようとしたのである。それぞれが帝国を支配しようとし、シンがそうしていたように、すべてのルーンを修得しようとし、さらにその魔法を使って、始祖王が想像だにしなかったほどの栄華を手に入れようとしたのである。

■■帝国のやりかた

その最盛期には、タッシリオン帝国は一干マイルを越す広がり誇っていた。海から聳えたつ山々まで、砂漠から川まで——帝国は広く、ありとあらゆる自然環境をその中に取り込んでいた。帝国の名目上の頭首はシンの息子や

娘たちだったが、彼らの実権はほとんどないに等しかった。実際、タッシリオンを統治していたのは7名の強力なルーンロードであり、ルーンロードとはすなわち、自分自身の退廃を満足させるために魔法を使う狂気の魔導師なのであった。この7人については、数百年にわたって同じ人物が生き続けていたのか、それとも師匠が死ぬごとにその弟子がその名と肩書きを受け継いでいたのかは、記録からははっきり読み取れない。

支配の徳：始祖王シンと女神リサーラの教えに基き、ルーンロードたちは富、多産、真つ当な誇り、豊穰、刻苦勉勵、正義の怒り、そして休息を支配の7つの美德とした。これは支配者の座にあって楽しむべきこととされるものである。が、ルーンロードたちはすぐにこれらのよい意味を捨て去ってしまい、支配における徳として強欲、肉欲、高慢、大食、嫉妬、憤怒、怠惰を奉ずるようになった。タッシリオンの崩壊以後、この“支配の徳”は魂を汚す罪悪として知られるようになった。その真の意味を知るものは、古代タッシリオンについて研究を重ねた僅かな学者のみである。

職業：タッシリオンの人々の職業は2種類のみ存在した。すなわち、軍人と供給者である。軍人は軍隊に属して軍事行動を行ない、戦いと単純な楽しみごとのみを称揚した。供給者とは農業従事者や鉱山労働者、芸術家や技能を持つ職人で、靈感によって生きており、ルーンロードのくびきからは比較的自由だった。今日では、軍人たちの名残はストローヴァル平原のショアンティのバーバリアンとして見られる。一方、供給者たちの名残はヴァリシア人であり、これはタッシリオン時代より続く神秘的な伝統を実践している遊牧民である。どちらの人々も、帝国の専制君主のことを覚えている——彼ら個々の名前はおろか、“ルーンロード”という肩書きさえ忘れられたとしても——そのような存在があったことは彼らの歴史や伝説の中に残っているのである。口伝に伝えられたバーバリアンたちの物語の中では、ルーンロードたちはアツァットという存在となっている。これは戦をもたらし、不名誉を行なったものを罰する広大なパンテオンである。ヴァリシア人たちはタッシリオンの支配者達をデーモンとして記憶しており、その名を口にするのはばかるのである。

■■帝国の領土

タッシリオンは独立した7つの領土からなり、それぞれが7名のルーンロードのひとりによって治められていた。逃れようのない搾取的な法の下で、それぞれの領土は領主のもっとも好む“支配の徳”を体現するものとなっていた。ルーンロードたちはいずれも、領土の名前と同じ名を首都につけていたが、さらにそこに“シン＝”の語を冠していた。始祖王以後、この語は古代タッシリオン語で、“皇帝の”とか“王冠の”という意味を持つようになっていた。つまり、シャラストの首都はシン＝シャラストと呼ばれたのである。

憤怒の地バクラカーンは、シャラストと東で境を接してい

た。ふたつの国家は、タッシリオンの崩壊を受けた大崩壊でバクラカーンの国土が破壊されて海に沈むまで、絶えず戦争状態にあった。バクラカーンの個々の部族は同じルーンロードを戴きながらも互いに憎みあい、常に戦争を繰り返していた。彼らは定期的にシャラストへの侵略を行ない、キャラバンから金やミスラルの鉱石を奪い、小さな居住地を襲っては略奪し、逆らうものがいれば怒り狂った。バクラカーンの深い森には、ゴブリンやノールやバグベアの首領に率いられた、シンスポンや人型生物の何百もの部族が住んでいた。フォレスト・ジャイアントの奴隷などはバクラカーンではきわめて普通に見られるものであった。

高慢の地キルシアンは伝統的にもっとも力のある領土であり、帝国の事実上の首都であった。大河が流れ、帝国の中央に位置することから、交易や交通の要地としてこの地は力を蓄えた。キルシアンの都市は周辺領土の都市よりも大きく、人口も密集していた。コルヴェイレス、シン＝キルシアン、ジャストノークなどの名が残っているが、現在でも人が住んでいる旧キルシアンの大都市は、僅かにトランデイのみである。また、他の都市よりもキルシアンの栄誉を讃える記念碑がより多く存在したのだが、それを建てたのはほかならぬルーン・ジャイアントたちと奴隷化したドラゴンたちなのである。キルシアンの空を飛ぶドラゴンたちは、その権力（これは誰もが考え付く）と、その尊大さの証であり、キルシアンのために働いたドラゴンはその褒美として、周辺土地を好きなだけ略奪することを許されたのである。

野望の追求と嫉妬の地エダッセルルは木材や貴石、鉄を多く産し、同時にジャイアントの奴隷や名馬、バイソンに似たオーロックス野牛、そして膨大な羊の群れを有することでも有名であった。だが、一方で恵まれない土地とも言えた。森からはワイルド・エルフの襲撃が頻繁であり、エターキャップやエティンの害も多かった。沼がちな川の都市シン＝エダッセルルはデスナの司祭の必死の努力にも関わらず相次ぐ疫病に悩まされ、今日では消滅してしまっている。近くの高地にメレサの都を建設する時の礎石となってしまったのだ。

多産と肉欲の地ユーリシニアは海へ向かう交通および遠隔地との交易、香料、そして金箱をいっぱいしようとする売春宿で栄えた街であった。風変わりな愛人を欲する嗜好はそのままユーリシニアの奴隷市場へとつながってゆき、やがてこの地は唯一、奴隷を輸入する地方となった。好まれるのはとりわけ海の向こうから連れてこられるエルフであった。ここの人々は海岸沿いに出没するゴーストやウィル・オー・ウィスプに悩まされることがしばしばであった。ここではよく船が難破し、水夫たちが溺れ死ぬのだった。海沿いの地には、サファグンたちの襲撃も日常のことであった。が、帝国の力が盛んになると、オーシャン・ジャイアントの奴隷がユーリシニアの船を海賊行為から守るようになったのであった。

腐敗と大食の地ガスタッシュは概ねにおいて平和な国で

あり、多くの人々が暮らしていた。領土は肥沃で十分な収穫に恵まれ、取れた作物は、農業を行なわない金持ちたちの国へと売られるのだった。平和と飽食はガスタッシュのよいところだったが、そうであっても、しばしば厄介ごとは起きた。アンケグの害は日常茶飯事だったし、プレイが出ては農民やルーンロードの召使達を何人も何人も食べてしまった。それに他の王国からは山賊たちがしょっちゅうやってくるのだった。現在のコルヴォサとその周辺地域を含む古ガスタッシュの領土は今でも肥沃な土地であり続けている。

休息と怠惰の地ハルカは帝国の南に位置し、のんびりしていて、怠惰で、それでいて抜けない国であった。孔雀の精霊トリサーラにそれぞれ仕える悪徳まみれの聖職者達は、自分の信仰が正しくて相手は異端なのであるとして、互いに互角の激戦を繰り広げていた。これは人々を行動へと駆り立てる数少ない事項のひとつであった。ハルカ人のほとんどは奴隷として働いたり、市場で買ってきたものをさらに売ったり、出なければ恵まれた立場を悪用して何もせずにとりまわっていた。この人々が冷酷で、時には偽善者であり、その本性は怠惰者であることは広く知られていた。ハルカの平和を乱す主な敵は(自分たちで起こす騒動のほかは)、野育ちのノールの部族やボガードの名で知られるカエルに似た人型生物、それに自由なヒル・ジャイアントたちであった。特に最後のは、主人に逆らって丘に逃げた奴隷を匿うので厄介だった。メタリック・ドラゴンの評議会の決定により、シン＝ハルカは破壊されたとする物語も存在するが、これは全くの法螺である。

富と強欲の地シャラストはストローヴァル平原のジャイアントたちのかつて住処であり、孔雀の精霊の修道院のあった地でもある。キルシアンに次いで大きい国家であるシャラストは国内に産する金やミスラルや銅の鉱石から富を蓄積したが、それでは決して満足することはなかった。ルーンロード・カルツォーグは常にさらなる富を欲し、首都シン＝シャラストの道は金で舗装されているとまで言われていた。実際は、金は宝物庫に送られ、さらに首都の錬金術の炉に送られて決して戻ってこなかったのだが。

シャラストは野生のオーガやフォレスト・ジャイアントが住むこと、そしてストーン・ジャイアントや異国のドワーフのアーティフィサーを奴隷としていることでも知られていた。この国では宝物が力強いマンモスのキャラバンによって運ばれていくのもしばしば見られた。普通の人々は鉱夫や鍛冶屋、貿易商として生計を立て、さらなる富を生み出していた。捨てられた鉱石が未だにストローヴァル平原には多く残っている。また、シャラストを横切る山中には、今も見捨てられた僧院や遺跡が今でも残るのである。

■■タッシリオンの支配者たち

偉大にして賢明なる始祖王シンが基礎を作った領土はタッシリオン帝国へと育ったが、結局かつては偉大だった帝

国の記憶として残ったのは、帝国を分割し、それぞれに置いた統治者が退廃した冷酷な暴君ルーンロードと成り果てたということだけである。誇大妄想気味の支配者たちは、自分の望みどおりに自分の領土を作り変え、自分たちの栄光を讃えるための記念碑を立て、国土を自らの際限のない墮落の象徴へと作り変えることで、その地を汚したのである。

ルーンロードのシンボルは、彼らの似姿を現した像と共に広く知られるものとなった。支配者達はそれぞれ特定の“支配の徳”と深い結びつきを持つようになった。それはつまり、彼らの姿が秘術の特定の流派を思い起こさせるものになり、同時に支配の上での七つの武器のひとつとも結びつくようになったということである。が、何はともあれ彼らは秘術の徒であったので、支配者達は堂々たる外見の儀礼的なポールアームを持った姿で描かれた。それはかつては彼らをタッシリオン帝国の守り手であり、同時に皇帝シン自身の守り手でもあることを示すものであった。このシンボルはルーンロードたちの墮落によって無意味なものになってしまったが、支配者達は己の似姿を現すにあたって伝統を維持し続けた。王錫を思わせる武器は、人々に、彼らが帝国の神聖期と関わりがあることを思い起こさせるとともに、彼らが魔法の支配者であることを具体的に示すものともなっていたのである。

憤怒のルーンロードであるアラツニストは、強力な血まみれのウィザードにして怒れる秘術騎士であった。彼女の魔法、麻薬、そして変異者による激怒に狂った軍勢は、彼女の紋章である雷撃の槍を負って隣国シャラストを襲った。人をひきつける力に優れた彼女は(一説には取り巻きを恐怖させ従える力だったともいわれるが)、バクラカーンを支配し、カルツォーグを屈服させるまであと一息というところまでいったが、世界に衝撃が走った時、彼女の王国の全土は海の底に沈んでしまったのである。ときどき、漁師の網にバクラカーンの貨幣がかかったという話が聞かれることがある。アラツニストの支配の象徴となる武器は、火を入れたアダマンティンでできた古代のランサーであった。そしてこれに、彼女は初代の憤怒のルーンロードの頭蓋骨を突き刺していたといわれる。

嫉妬のルーンロードであるペリマリウスはエダッセリルの女王でもあった。彼女は気難しく悪意に満ちた政治家であり、彼女の手が届かないところで策謀を巡らし栄えている仲間達を見張るのに魔法を消費していた。その結果、彼女は他のルーンロードたち全てに対してあれこれを気をもんだり陰謀をめぐらしたりし、彼らを騙し、毒を盛り、暗殺者の手にかけてしようとなった。彼女の王国がいかんして機能していたかは明らかではないが、すべての記録に明記されているのは以下のようなことである。すなわちこの国は完璧な支配、完璧な調和、そして完璧な秘術の技能によって治められた偽りの楽園であった、と。公式記録を見る限り、エダッセリルには何の問題も起きてはいない。他

のルーンロードたちは彼女に関して話し合うことを拒んでいたようにも思われる。彼女はルーンロードの中でも最長老のがっしりした女性であり、常に黒檀の杖と喋る鏡——古代の品物のなかにあつてさえ骨董品級のもの——を持ち歩き、鏡に向かって度々相談事を持ちかけるのだった。彼女が支配の証として手にするのはハルバードのような武器で、これは人の記憶を奪う力があるのだといわれていたが、偏執的な女王が戦闘でこの武器を用いることはめつたになかった。

強欲のルーンロードであるカルツォーグは、計算高さと非情さで知られるウィザードであった。ハーフ・ヴァンパイアであったとも、ドラゴンの血をひくとも噂されている彼の行動は、すべて純粋な欲に動かされてのものであった。確かにカルツォーグは強欲で、またひどく墮落していた——収税人の持ってきたものに、ほんの銀貨数枚の欠けがあったといって都市をまるまるひとつ滅ぼしてしまったことでも彼は知られている——が、これは彼の力や魔術への献身と引き換えにルーンがもたらしたものでもある。彼はバクラカーンの女王アラツニストとの間で暗殺者や魔法の毒、それにデーモンを送りつけあうなどの長い暗闘を繰り広げていた。最終的には何らかの力が働いて彼女の王国を水底に沈め、さらにはタッシリオン帝国をも崩壊させてしまった。カルツォーグは非常な魔法の達人であったことから、王国丸々ひとつを滅ぼしたこの事件の引き金を引いたのは彼ではないかという説もある。彼が支配の象徴として持っている武器は炎を上げるグレイヴで、綺羅星のごとき宝玉で麗々しく飾り立てられていた。

怠惰のルーンロードにしてハルカの長クルーンは、ルーンロード達の中ではもっとも穏やかな——というよりは不活発な領主であった。彼の支配の見返りとはすなわち無気力と怠惰であった。クルーンは穏やかなルーンロードとして知られ、戦争には興味を示さず、しかし攻撃してきたものに対しては強大な力で応えた。彼はルーンの女神リサーラの筆頭司祭であり、彼のルーンの修得は完璧であった。彼の武器は彼が奉じる秘密のルーンの全てを刻み込んだロッドであり、彼の肉体には百もの秘密の呪文のシンボルが書き込まれていると囁かれていた。彼が時を越えて生き続けたこと理由はそれかもしれない——己の放ったルーンをそのまま我が身に叩き返してくるかもしれないこの人物と、あえてことを構えようというルーンロードはほとんどいなかった。彼が支配の象徴として持っていた武器は、武器自身の意志で動いたり攻撃したりが可能なドラゴントゥース・ロングスピアであった。

肉欲のルーンロードにしてユーリシニアを治める淑女ソルシェンは、常に贅沢で扇情的な赤と白の長衣をまとい、すっかりミスラルでできた、みだらなものを連想させる形の細長いスタッフを持ち歩いていた。戦いにおいては、彼女はそれぞれ男性器と女性器を刻印した双頭のギザームを操り、また、2人の扇情的な姿をしたガーディアンを召喚す

るとも言われていた。彼女の魔法は、彼女の魅惑的な声でしか操れないものであるとも言われていた。歌で、流し目で、そして触れることで、彼女は長年にわたり、他のルーンロードたちを誘惑し、そして裏切り続けてきた。彼女があてにならぬ女であるとして知られながら、ルーンロードたちは繰り返し彼女を信じるのであった。彼女の提案は常に、非常にもっともなことのように見えたのだ(が、それは常に、彼らが彼女に何かの優位を譲るといふようなものであったのだ)。私生活においては、ルーンロード・ソルシェンは娼婦であり、彼女を褒め称える何者とも寝床を共にしたということでは一致している。彼女の強姦や倒錯、暴力に関する告発は、彼女に敵対するものによって誇張されているきらいもあるが、もしそうだったとしても彼女が一貫して非常に非道であったのは確かである。彼女は自分のプライバシーのみを非常に重要視しており、そのために彼女の宮殿で働く召使達はすべて視力を奪われ、ほとんどは啞者でもあり、互いに触れることによってのみ、意志の伝達を行っていたのである。

高慢のルーンロードにしてキルシアン首長の首長たるシャンダーグは、孔雀の玉座への献身者にして肉体と精神、そして魂のわざを極めたものであった。ルーンロードの中でただひとり、孔雀の精霊を奉じる彼は、彼の領土こそが古代帝国の首都だった場所であり、自分は他よりもぬきんできた存在であると称していた。驚くべきことに、この主張は概ねにおいて正しかったのである。彼の面差しは厳しく傲岸であり、彼に王者の末裔としての風格を与えていたと言われる。彼は自分であれば片手ででも帝国をまとめられると自任しており、そのために彼の領土を、エンジェル軍の軍隊で守られた、世界で最も優れかつ裕福な市民たちの楽園にしようとした。ルーンロードの中において、彼は政治的な争いや戦争には関わらないことに非常な誇りを抱いていた。彼は自分や自分の王国はそのようなものを超越しているとみなしており、天使の軍勢はその他の、本当に重要な目的のために疲弊させずにおこなったのである。交渉術と芸術を極めた彼は癒瘡木製の羽で飾られたスタッフを持ち歩いていた。しかしいったんことが起これば、ゴッドセプター(神の王錫)の凄まじい遣い手ともなった。これはルツェルンハンマーに似たポールアームで、シンその人によって鍛えられたといわれていた。重要なのは——年々その傲岸さには磨きがかかっていったとはいえ——彼は、神聖期にもっとも近いルーンロードだったということである。

大食のルーンロードであるズサは、無数の奇矯な悪徳に耽溺したが、もっとも彼が溺れたのは純粋な生命のエネルギーを摂取することに対してであった。彼はガスタッシュの支配者であり、肥沃な国土と豊かな海を支配していた。彼の身体は絶えず“更新”を必要とした。なぜならば彼はアンデッドであったからである。彼は命あるものが感じるこ

はすべて同様に感じる事ができたことから、この病的に肥満したルーンロードは同じ献立を二度食べることはないのだとも、世界中から珍しい食べ物を取り寄せ料理人を奴隷として連れてこさせているのだともいわれていた。斯様に自然に逆らった存在ではあったが、彼自身は賢い商人であり、“武器を持っているよりもペンを持っているときのほうが剣呑だ”と描写されることもしばしばであった。彼が好む武器はひと組の魔法の指輪とアイウーン・ストーンであり、彼はいかなるウィザードも知らぬこれの使い道を理解しているのだとも、また彼の支配の象徴の武器であるサイズに似たポールアームよりもこちらを好むのだともいわれていた。ズサの領土からは、あらゆる戦場において、いずれの側にも食料が輸出された。そしてそこで彼をごまかそうとしたものは、じきに自分の領土の銅や錫、ウールやオイル、小麦やライ麦、その他の資源がすっかり乏しくなっているのに気付くのだった。

■■タツリオンの信仰

ルーンロードたちの大半はそれほど信心深いわけではなく、人々がリサーラ以外の神を信仰することにも否定的だった。彼らの支配を脅かすような信仰があれば、彼らはそれを迫害するのが常だったが、タツリオンの人々は(特に供給者の人々にその傾向は顕著であった)秘密裏に信仰を続けたのである。

■リサーラ

リサーラはルーンと運命と報奨の女神であり、厳しい義務と服従を要求しはしたが、その見返りは莫大なものであった。彼女を信仰することはすなわち支配者の価値と価値観を受け入れ信じるということでもあったが、一方でそれは、全ての労働者は対価を受け取るべきであり、すべての労働は報われるべきであり、逆境にあっても信仰が救いとなることを信じるということでもあった。帝国の初期に見られた彼女の禁欲主義は、後にはただただきつい労働が課せられるといったものになり果てた。彼女を奉ずる教団は、自身を鞭打ち、苦行を行なうことで知られていた。一方で重要な聖日には“秘印の饗宴”として派手な浪費を行なうのだった。リサーラへの信仰は絶えたが、彼女のルーンとその力は今日でも生き残っていると信じるものもある。

■孔雀の精霊

孔雀の精霊は精神と肉体と魂の神であり、魔導師や学者、そして苦行者たちがこれを振興していた。またこの神は、ルーンロードの騎士団である緑の羽騎士団を後援していることでも知られていた。この神については理解が難しいが、男性神格でも女性神格でもなく、絵姿や彫刻として表されるときもひとつの目か羽以外の形では表されない。この精霊神の本質は、何枚ものヴェールの奥に丹念に隠されていたのである。この神の秘された名前と知れば知るほど深ま

る謎は、教団の参加者や司祭たちにのみ明かされ、教団が失われるとともにこの秘密も知るものがなくなった。孔雀の精霊の信者たちは、たびたび精神や肉体の恐るべき力を示し、彼らの信仰が潰えたことは大なる損失であった。帝国初期の皇帝たちは全て孔雀の精霊の信徒であり、そのシンボルは彼らの玉座に描かれていたのだった。

■ミンダーハル

ジャイアントの王ミンダーハルは力とジャイアントの神である。その数多い神殿の中に、彼は、力強いジャイアントの鍛冶屋か、怒り狂ったストーン・ベヒモスの姿で描かれていた。彼への信仰は時を経て変質し、また彼を報じるジャイアントの間でも種族間で信仰形態は異なっていた。彼への信仰は法と正義と技術——石工としてのものと金属を扱うものの双方——を重要視するものであった。後にはこの神はルーン・ジャイアントのパトロンであるともされ、彼の司祭はルーンロードへの服従を強いられたのだった。

ミンダーハルは現在でもストローヴァル平原に散らばるいくつかの部族から祀られてはいるものの、その信仰のほとんどは散逸し、失われてしまった。彼の偉大な神殿や精錬所、採石場も兼ねた社はすべて失われ、かつてはその宝物庫を埋め尽くした血の捧げものと宝物も、今では残骸に過ぎなくなっている。帝国が絶頂期にあったときでさえ、ミンダーハルは一般の人々や奴隷となったジャイアントたちからあがめられる神であった。彼は結局、帝国の強力な記念碑の建築者たちの神ではなかったのである。

■デスナ

女神デスナは夢、星々、旅人たち、そして幸運の神である。彼女は西の海で生まれ、大嵐によって陸へと運ばれてきた。彼女の2つの領域は、幸運と旅である。何年もの間、彼女は予言と吉凶占断、そして予兆の力を人々に分け与えてきた。タツリオンにおける信仰の中で、彼女に対するものだけが今日まで生き残り、現在では彼女の信者は世界中に遍く存在する。旅人たちのための彼女の神殿には、巡回司祭の指導の下に、常にろうそくや食べ物、薪が蓄えられている。

■フィンド信仰

タツリオンじゅうで“支配の7つの徳”への耽溺がみられたことは、やがてゴラリオンじゅうの、そしてその彼方の悪しき存在の注意を惹きつけた。サウマタッグは、これらの根本的に悪である存在の代理人にして伝道者であった。彼らはその邪教じみた教えを帝国じゅうに広め、普通の人々が主人の徳を称えるようにその存在を誉めそやした。これらの信仰はルーンロードたちによって厳しく禁じられたが——皮肉なこと、彼らの複数がこの悪の存在との契約から力を得てはいたのだが——これらの暗い存在への信仰は地下にもぐって広まった。相当の大きさと影響力を持ちえた

教団としては、マモン、オルクス、パズズ、ルビカント、そしてラマシツなどがあつた。とりわけラマシツ信仰はタッシリオンに広まり、最終的に彼女が神の地位を得る重要な一歩となつたのである。

■■タッシリオンの巨石記念碑

奴隷巨人の軍勢を使って、タッシリオンのウィザードたちは巨大な墓や膨大な魔法的建造物、そして驚異的な記念碑を建てさせた。それらは今日までその形を残し、過ぎ去つた神秘の時代の物言わぬ証人となっている。これらの記念碑の多くは現存している。人間のものでは到底ありえない大きさのそれらは、ルーン・ジャイアントやストーン・ジャイアントが立てたものであると考えられる。その全てにおいて、何のために、どういう目的で存在したのかということは忘れ去られてしまつている。最も有名なものを以下に列挙する。

アンゲヴィックの黒い広場
デスガードの千の柱
ミツバチのドーム
落ちたルーンの輪
リサーラの大神殿
レムリスの緑の尖塔
空洞山
橋の島
淑女の明かり
ミンダーハルの金床
ムンダテイのオベリスクの森
ルーン廟
ストローヴァルの階段
沈める女王
イグラスの波止場

■■タッシリオンの崩壊：栄光と凋落

タッシリオン崩壊の理由は依然謎のままであるが、帝国の最後が近づいてきたとき、7名のウィザードの王はいずれも、配下たちにこの先帝国の再建が叫ばれるようになったときに我らを解放せよといひおいて、偉大な建造物の奥深くにそれぞれ姿を隠し、自らを封印したのだつた。その命令に背いたものは奴隷の身分に落とされるか、あるいは殺された。彼らを目覚めさせるべきものはやがていなくなり、タッシリオンの秘術の王たちは長い長い年月を、そのまま眠り続けた。古代帝国について研究を行なつた学者はほとんどいながつたが、それでも全く存在しなかつたわけでもなく、彼らによって帝国崩壊に関する3つの学説が提示され、今に伝わつている。

アボレスの復讐：学説のひとつは、アボレスたちが帝国を破壊したというものである。ルーンロードたちは生命の創造の魔術に関するアボレスの秘文を盗むか、あるいは破

壊しており、それに対する遅い報復だつたのだ、と。侵略は海から始まつたという。そして川や湖を伝つて内陸部へと侵攻していき、最終的にはルーンロードへの忠誠を表明してつた全てのもを覆し破壊つしたのだ、と。この説を支持する証拠はどれも完全なものではなく、それを“アボレス説”を説明するものとして喜んで論じたがる学者はほとんどいない。

タッシリオンと彼方のもの：帝国初期の法と義損の精神は、やがて墮落と縁故主義に道を譲り、次元を超えた異形のものたちの召喚が行われるようになった。召喚されたものの中には、輝く子供たちや深紅をまとい歩くもの、倒錯した巨人たち、そしてジャンデライのオリファントと呼ばれる強大なクリーチャーもあつた。オリファントは強力だが操るのが困難なクリーチャーで、これはたつた一度、侵入してきた軍隊を破壊するために召喚されたのだが、孔雀の軍勢の1/4を破壊したところで姿を消した。この学説は、この正体の知れないクリーチャーの狂気が触れるものをすべて捻じ曲げ、タッシリオンのルーン魔法を過去の栄光のまがい物に変え果てたのだと示唆する。魔法が失われた以上、本質的には墮落し崩壊してつたタッシリオンは領土ごとに別れていさかきを起こし、そしてどのひとつとして中央の玉座を守るほどの力はなかつたのだ。残念なことに、失われて久しい帝国の魔法について、その変質を語れるものは誰もいない。

ジャイアントたちの叛乱：この学説では、ルーンロードたちに仕え、その権力を守つてつたルーン・ジャイアントたちが、ある年の夏、収穫前の時期に突然叛乱を起こしたのだと説く。畑や森に火を放ち、自らの手で建てた記念碑を引き裂き、すべての兵士、すべてのリサーラの司祭、タッシリオン教団の全ての修行僧、そして見つかる限りの全てのウィザードとソーサラーを飲み込んだのだ。彼らはルーンの女神と孔雀の精霊のありとあらゆる象徴を破壊し、以後、ルーンの習得や使用を完全に禁じたのだという。支配者層を一掃すると、ルーン・ジャイアントたちは北へと去つてゆき、二度と戻らなかつた。学者たちの中には、これは帝国崩壊の過程で生じた減少であつて、崩壊の原因ではないと主張するものもある。

——コラム集——

罪の魔法

ルーンロードたちはそれぞれ魔法の一流派の長であり、その流派に特化しては最も凄まじい才能を発揮するウィザードである。タッシリオンでは、魔法の流派として認識されていたのは7つのみである(占術魔法はどの流派にも共通するものとされていた)。そして7つの流派は7つの“支配の徳”とそれぞれ結びつくとなっていた。

嫉妬: 他者の魔法を自分のそれよりも貶めるわざ。関連系統: 防御術; 禁止系統: 力術、死霊術。

怠惰: 代理人や配下を呼びつけて自分のなすべきことを行なわせる、あるいは自分の欲するものを欲するままに作り出す。関連系統: 召喚術; 禁止系統: 力術、幻術。

肉欲: 自分の望みをかなえさせるために他者を魔法的に操ったり支配したりする。また、他のクリーチャーの精神や感情、意志を操る。関連系統: 心術; 禁止系統: 死霊術、変成術。

憤怒: 魔法そのものの破壊力を支配し、その破壊的な力を現世に放出させるわざである。関連系統: 力術; 禁止系統: 防御術、召喚術。

高慢: いかさまと幻の力で、自分の外見や自分の力を完璧に見せるわざである。関連系統: 幻術; 禁止系統: 変成術、召喚術。

大食: 物質的な肉体を操り、命への絶えざる渴きを満たそうとするものである。関連系統: 死霊術; 禁止系統: 心術、防御術。

強欲: 魔法により、あるものをより価値があるか使いでのあるものに変えるわざであり、また自分自身を物質的に強化するわざでもある。関連系統: 変成術; 禁止系統: 心術、幻術。

キャンペーンの概要

“パスファインダー”誌の最初の6冊では『ルーンロードの復活』の連載を行なう。これは牧歌的なサンドポイントでの1レベルの冒険から始まって、15レベル、シン＝シャラストの神秘にして不可解なる尖塔へとPCたちを導くものである。本キャンペーンを運営するGMのために、以下、キャンペーンの今後の展開をざっと述べる。GMはこれらの情報を用いて来るべき出来事の予兆を演出したり、自分のキャンペーンにより適合するように、シナリオに手を加えたりするとよい。

『スキンスウの殺し屋』by リチャード・ペット、4-6レベル用

一人の殺人者がサンドポイントを恐怖に陥れている。犠牲者は自身を“スキンスウの男”と称する狂人によって切り刻まれ、顔がわからない状態にされ、胸に謎めいたルーンを彫りこまれている。調査に乗り出したPCたちは、スキンスウの男の配下であるグールたちと遭遇する。さらにPC

たちはサンドポイント近郊の幽霊屋敷で、その殺人者とも対峙する——殺人者はPCたちの知人、アルダーン・フォックスグローヴである。そこで、彼がマグニマールに拠点を持つより大きなカルト教団の密偵であったことが明らかになる。

PCたちがスキンスウの男と関わりがあると知れると、PCたちを容疑者として捕えようと、聞く耳をまるで持たないマグニマールの衛兵たちがやってくる。PCたちはマグニマールに向かい、スキンスウの教団の調査をしつつ投獄を避けて立ち回らねばならない。が、教団の連中は自分たちが追われていることを余りにも知りすぎているように見える。調査を行ううちに、PCたちは放棄された時計塔にたどり着く。彼らはこの塔に潜入し、教団員たちと戦い、その首領と対峙せねばならない。教団を率いるのはシン＝シャラストの遺跡からやってきた、サディスティックなラミアである。PCたちは知らぬことだが、このラミアはルーンロード・カルツォーグの覚醒を助けるために、駆り集められた“強欲な魂”によって力を得ている。そして彼女がシェードロンのルーン＝ヌアリアやスキンスウの男が持っていたのと同じもの——を使用していることから、さらに大きな陰謀の存在が垣間見えるのである。

『手鉤山の虐殺』by ニコラス・ローグ、7-9レベル用

街の大英雄となったPCたちに、サンドポイント駐屯地から依頼が寄せられる。街の東にある手鉤山と呼ばれるごつごつした岩山にある辺境警備城からの連絡が急に途絶えたので調査して欲しいというのだ。PCたちが到着すると、そこはオーガの群れに蹂躪された後である。PCたちはぼろぼろになったレンジャーたちの一団と合流し、砦を取り返そうとする。

その目覚ましい働きを見たサンドポイント軍は、PCたちに件の砦を任せたいという。新しい拠点で過ごすうちに、PCたちはさらにいくつかの事件に巻き込まれる。そのひとつに、近くの森の中で化け物が出るというものがある。化け物とは、かつてのこの砦の指揮官の恋人だったニフのゴーストである。彼女をなだめるために、PCたちは件の指揮官をオーガどものところから救い出してやるか、でなければその遺体を持ち帰って彼女の墓と一緒にうずめてやらねばならない。

PCたちは北へと向かい、オーガの村で彼らと対峙する。そこは現在、ストーン・ジャイアントのウォーロード、パール・ブレイクボーン司祭に支配される砦となっている。彼はシェードロンのルーンを堂々と身につけ、オーガどもを使って集結しつつあるストーン・ジャイアントの軍勢に持たせるための武器を鍛えさせている。彼を倒すことでPCたちはさらなるオーガの襲撃を未然に防ぐことには成功するが、同時にストーン・ジャイアントの軍勢がすでにサンドポイントさして進軍を開始していることも知る。

『石巨人の城砦』by ウォルフガング・パウアー、10-11レベル用

サンドポイントを守るため、PC たちはストーン・ジャイアントの軍勢と壮絶な戦闘を繰り広げ、彼らを追い返さねばならない。侵入者を追い返したところで PC たちは、自分たちが戦ったのは偵察部隊に過ぎず、敵の本体は未だに山中に集結していることを知る。また、人間を叩き潰そうとする巨人の集結を指揮しているのはジョルゲンハースという一部族であり、彼らを倒さねばサンドポイントが潰されるということも明らかになる。件の部族の城砦に忍び込んで預言者モクムリアンとその仲間である変装したラミアの司祭を倒すことだけが、サンドポイント破壊計画を潰えさせる唯一の希望である。

巨人達の脅威を取り除く過程で、PC たちはモクムリアンがカルツォーグの代理人であることを知る。そしてこの強欲な巨人を殺すことで、PC たちは知らずして、この半ば復活しかかったルーンロードが完全なる復活のために必要としていた魂の数を、ほぼ満足させてしまうのである。タッシリオンに関する知見を集めたモクムリアンの図書室を調べることで、PC たちはルーンウェルがカルツォーグの力を集めるために使われていること、またルーンウェルの魔法にはルーンフォージとして知られる古代の秘術の装置を用いることで対抗が可能であることを知る。

『救い主の罪』by ステファン・S・グレアー、12-13レベル用

ルーンフォージへ至るための地図を探して、PC たちはサンドポイント地下の憤怒の地価墳墓に戻ってくる。件の遺跡の深い危険な層を探索し、彼らはずいぶんその装置が北方の凍った山中の湖の岸にあることを知る。そこへいたる冒険の中で PC たちはホワイトドラゴンとひと悶着を起こす。それは、ルーンフォージのダンジョンへの入り口を探している時のことである。地下には、古代タッシリオンの不老の軍勢に守られた、畏だらけのダンジョンが広がっている。そこを戦いながら行くうちに、PC たちはルーンフォージの原初の力によって自分たちの武器を強化する機会を得る。その後も彼らはこのダンジョンの外側にある7つのセクションを巡り、武器の上に秘術のルーンを刻まねばならない。最終的に PC たちは、シェードロンのルーンを含むタッシリオンの古代ルーン魔法と戦うための、個々の秘印を得ることになる。

『シン＝シャラストの尖塔』by グレグ・ヴォーガン、14-15+レベル用

カルツォーグやその配下と戦うため、PC たちは高く聳える山深く、広大な廃墟となったタッシリオンの都市、シン＝シャラストへと旅する。カルツォーグは未だシン＝シャラストから離れることはできないが、PC たちがラミアやクラウド・ジャイアント、ドラゴン、そして古代魔法によって彼が作り出したクリーチャーを倒さない限り、早晚カルツォーグは

シン＝シャラストの外へと現われるだろう。が、まだ PC たちには、ルーンによって強化された武器を用いてカルツォーグのルーンウェルを破壊するチャンスがある。そして最終的には、PC たちは、強欲のルーンロードであるカルツォーグそのひとと戦うことになる。